

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

―ある高校教員の研究遍歴―

佐々木 幹雄

一 はじめに

本稿は、二〇二〇年三月、三七年間勤めた早稲田大学本庄高等学院（以後、本庄高等学院、本庄学院、または単に学院と記す）を七〇歳で定年退職する一教員（筆者）の研究の足跡を綴ったものである。大学に入学してから今日で五〇年、その時々々に考えたこと、出会った人々を思い出すままに書き留めた。「研究」といつても、世に問うほどこに学術的ではないので、自己満足の「勉強」と読み替えていただいても結構である。

大学に入るまでは、勉強はむしろ嫌いな方で、成績もよくなかった。学部に入學した当初は、四年後にはどこかの高校の教員に「デモ」なるかな、と漠然と思っていた。ところが、ひょんなことから修士課程に進むと、不思議なもので、「勉強って意外と面白いじゃん」と思い始め、後期課程に入ったら俄然、「好き」になった。あるテーマを追いかけると、別のテーマが現れ、さらに調べると、思いもしなかった世界が展開してくる。次からつぎと湧いてくる疑問を追いかけるのが

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

楽しく、「知」の世界の奥深さに惹かれていった。

「大学院に入ったら就職は遅れるぞ」といわれた。その通りで、齡三三で、私は、ようやく本学の教員となった。典型的な「デモシカ」である。学院では一貫して歴史、日本史を担当した。それではこの三七年間、私は生徒たちに何を教えてきたのか。はじめは受験で暗記した日本史の知識と、学部、大学院で学んだ古代史、考古学の知識をベースに授業を展開した。

しかし、ある時、気がついた。学部や大学院で得た知識の切り売りでは教員生活はながく務まらない、知識は色あせ、かつ枯渇する、知識を新鮮に保ち、深め、広げるには、常に教員みずから「知」と関わり、勉強していなくてはならない、そしてなによりも、大学付属の高校教員としては、数年後に学部、さらに、大学院に進み、「知の海」を泳ぐ生徒たちに、一人の先輩として、勉強する姿を見せておくことは必ずや生徒たちにとって刺激になる、教員も勉強しなきゃ、と。

幸いなことに、本学教員にも学部とおなじく個人研究費が支給される。また、特定の研究テーマには助成費が与えられ、さらに、私も二

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

度ほど利用したが、一〇数年に一度、一年間の研究休暇制度がある。本学教員の研究環境は実に恵まれていて、そのお陰で、常に何かを追いかけることのできた、刺激的で幸せな半世紀であった。実にありがたい、心より感謝している。

私はせっかちな性格である。十分な考察もせず、拙速に結論を求めることが多くあった。今にして思えば、この世から消し去りたい論文も五指に余るほどである。大学院生の時、菊池徹夫先生（文学部、考古学）から「論文は熟した柿が自らの重さに耐えかね、自然と枝を離れるようなものがよい」という主旨の話を伺った。若かった時は「なんて悠長な……」と思っていたが、今は「その通り」と、反省している。末尾にそんな未熟な「柿の実」をいくつか並べたことをお許しいただきたい。

二 三輪（みわ）のまつり

（1）「知」の世界に触れる
大学紛争のなかで

一九六九年一月、東京大学は、「七〇年安保」などで学生運動が激しく、安田講堂の「攻防戦」もあって、その年の「入学試験を中止する」と発表した。当然、東大を目指していた受験生は京大、一ツ橋、早稲田、慶応などの各大学に流れた。その年、「二浪は絶対いやだ！」と、予備校に通い早稲田を目指していた私にとっては青天の霹靂であった。「ええー、そんなのありかよ、東大志望の受験生なんかと競争したくないよー」と不安を抱きながら、私は早稲田大学第一文学部

I 類学科を受験した。

結果はなんと合格。それでも心配性な私は、「もしかしたら間違いは？」と不安で、最初の授業で自分の名前が呼ばれて、ようやく、「ホッ」としたことを今でも覚えていいる。やはり、同級生のなかには、翌年、東大を受験する人がいて、合格したのか、何人かが早稲田から「消え」ていった。こうして、革マル、民青の「アジ」演説が飛び交うなか、立て看板の立ち並ぶスロープを上り下りする、私の学生生活が始まった。

その年、四月初めの科目登録後、予定通り授業は始まった。が、五月の連休明けから突然、革マル主導の授業бойコットが数ヶ月、その後大学側のロックアウトがやはり数ヶ月続き、半年以上、まったく授業が無かった。十二月に再開した授業もわずか三ヶ月で学年末となり、翌年も十分な授業はなかった、と記憶している。二年生の秋に、大教室で授業を受けていた時、何処からか、三島由紀夫が市ヶ谷の自衛隊庁舎で割腹自殺したらしいという話が伝わり、一瞬、教室がざわついたことを記憶している。

私の大学一、二年次はまさにこのような、なんとも騒がしく、かつ激しい時代であった。「満足」に授業も無く、今なら保護者の抗議で大問題になっているであろうが、おおらかな時代で、私を含め大多数のノンポリ学生は無事進級を重ねることができた。

知との出会い

三年次になって、入学した時から決めていた日本史学科に進んだ。当時の日本史学科の教員には、近代政治史の深谷博治、近代思想史の

鹿野政直、近世貨幣史の滝沢武雄、中世古文書学の荻野三七彦、中世荘園史の竹内理三、古代天皇制研究の水野祐、北方考古学の桜井清彦など、斯学の泰斗がキラ星のごとくいらした。

一緒に進級した日本史学科の多くの学生は自分の学びたい時代や分野、指導を受けたい教員をすでに決めていた。が、私はといえば何とものんびりした学生で、専門とする時代をまったく決めていなかった。そこで、関心のあるものに次ぎつぎと首を突っ込んでいった。

圧倒的な人気であった鹿野先生の近代思想史に魅力を感じ、北一輝などの「超国家主義」に関する本も読んだ。また、近世経済史の上杉允彦先生からは「地方（農村）」文書を読む手ほどきを受け、仲間と「近世文書勉強会」も立ち上げた。卑弥呼や邪馬台国を研究し、さらに万世一系の天皇制に疑問を呈し、王朝交代論を和服姿で語る水野先生の古代史にも惹かれ、『古事記』や『魏志倭人伝』も読み漁った。古代史絡みで桜井先生、久保哲三先生（考古学、古代史）から考古学も学んだ。文献・民俗学を絡めて古墳の葬送儀礼を研究する久保先生の指導で仲間と『常陸風土記』も読んだ。

学部三年の秋に、東北、北方を研究フィールドとする桜井先生の引率で平泉、下北など東北を巡る研修旅行に参加した。エミシ、藤原氏など中央政権により征服された辺境の人々の歴史や、恐山に残るイタコの口寄せに見る人間のおどろおどろした霊的世界にも強く惹かれた。実にさまざまなジャンルに関心をもち、自分の方向を決めかねていたが、三年の夏に久保先生の紹介で、関東では珍しい小銅鐸出土した神奈川県海老名市にある本郷遺跡の発掘調査に参加した。この体験

は私の研究の方向を決める大きなきっかけとなった。自分で掘った弥生土器の破片を掌にのせてじつと眺めていると、この土器を作り、使った当時の人々と千数百年の時を超えて触れているような、何とも不思議な興奮を覚えた。ここに、物言わぬモノ（遺物）を通して当時の人々の思いを語らせるといふ考古学に魅力を感じたのである。

一年後に提出する卒論のテーマが決まった。題して『弥生時代論』。大げさなタイトルであるが、「弥生時代とは何か」ということを、『魏志倭人伝』に記す二世紀末の「倭国大乱」と当時の祭祀遺物である青銅器の出土状況を絡めて検討したものである。その内容は、「倭国大乱」とは日本が王権国家を迎えるためには避けることのできなかった戦争であり、弥生時代は差別や搾取のない平等で無階級社会の縄文時代から人を差別し、搾取・支配する王権国家（Ⅱ古墳時代）に移行するための過渡期的役割を果たした時代である、というものである（一九七三年一月提出『弥生時代論』主査久保哲三）。

当時、歴史を語る場合、文字史料で語るか、モノ資料で語るか、まずは、別々に分けて研究するのが基本とされた。その後、それぞれ研究された成果を突き合わせて検討し、その上で歴史を語るというのが常套手段であった。方法論が異なるからである。ところが、私はいえ、文字史料とモノ資料の都合の良いところを結びつけて解釈したのである。今では「学際研究」ともいえるが、当時は「邪道」とされた。それでも、主査の久保先生は文字とモノとを結び付けて研究する姿勢に理解を示してくれた。

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

(2) 「三輪のまつり」の原風景を求めて 三輪に魅せられ

一九七三年四月、早稲田大学大学院の修士課程（文学研究科日本史学）に進学した。当時、大学院には考古学科がなく、日本史学科に考古学を担当する教員として桜井先生と滝口宏先生（教育学部）がいらした。私は、文字史料も扱うということで、武蔵、上総、下総、安房の国分寺を調査し、古代寺院址研究の権威であった滝口先生のゼミ生となった。

滝口先生は私に自由に研究をさせてくれた。学部での卒論は、学生運動の激しい当時の世相もあってか、意識したわけではないが、なぜ

か、国家、社会、権力、

搾取、階級といった堅

く、「政治」臭の漂うテ

マであった。実はこうし

たテーマは自分の性に合

わないことを、うすうす

感じていた。大学院で

は、いま少し古代人の

「情」が感じられる「信

仰、祈り」などをテーマ

にしたいと思っていた。

そこで浮かんできたの

が、学部時代から気に



写真1：伝承の三輪山

なっていた『記紀』に記す「三輪山伝説」である。

三輪山とは奈良県桜井市にあり、大和盆地の東南隅に位置する標高四六七㍎の小高い山である。盆地から眺めると、円錐形の山容はなだらかで美しく、万葉集にも詠われ、古くから「神の宿る（甘南備）」山として大和の人々の信仰を受け継いできた（写真1）。山そのものが御神体なので、山麓にある社（大神神社Ⅱ大和国一宮）には今も神殿がない。『記紀』にも、三輪山の神Ⅱ大物主大神が天皇家や時々の王権と密接にかかわる神話や伝説が数多く記されている。

こうした信仰、伝説を物語るかのように、三輪山の山中、山麓からは古墳時代以降の祭祀遺跡（磐座など）が確認され、これまで多くの祭祀遺物（石製・土製模造品など）が出土している。

『古事記』に記す「三輪山伝説」とはおおよそ次のような内容である。第一〇代崇神天皇の世に、疫病など禍が多く起った、心を痛めた天皇の夢枕に三輪山の太物主大神が現れ、次のように告げた、「禍は私の思いである、オオタタネコをもつて我を祀らせば、国は安らかになる」と、そこで、諸国に命じてオオタタネコを探させたところ、河内の美努村で見つけた、天皇は「お前は誰の子か」と問うと、オオタタネコは「私は太物主大神と和泉の陶邑（朝鮮半島から伝わった須恵器を生産する邑）の陶津耳の娘イクタマヨリヒメとの間に生まれた子の曾孫に当たる」と答えた、ここに、天皇は国が安らかになることを喜び、オオタタネコに太物主大神を祀らせた、と。

話はそれで終わらない。続いて、『古事記』はオオタタネコを神の子（子孫）とする次のような異類神婚譚を載せている。イクタマヨリ

ヒメのもとに、夜な夜な姿かたちが美しく、身なりの良い若者が通い、娘は身籠る、娘の父母は、若者の正体を探るべく、通つて来る男の衣に麻糸を着けることを娘に教える、父母の教えに従った娘は、明るく朝、家の戸の鉤穴を抜けて続いている麻糸を頼りに尋ねゆくと、三輪山の神の社に至り、ここに、男が三輪山の神と分かった、と。鉤穴を抜けたことから夫は蛇（異類）と想定された。

一方、『日本書紀』ではいささか違っている。三輪の神が現れた夢枕は崇神天皇ではなく、天皇の大叔母であるヤマトトソモソヒメらの夢枕であり、オオタタネコの発見地は河内の美努村ではなく、茅渟縣（和泉国）陶邑とする。また、異類神婚譚では神の妻はイクタマヨリヒメではなく、ヤマトトソモソヒメとなり、モモソヒメが夫の正体を蛇と知り、驚いて死ぬと、人と神とが昼夜交代して墓を造った、それが三輪山の麓にある箸墓である、としている。

『記』と『紀』では人物、地名など微妙な違いがあるものの、三輪山の大神主大神の祭祀が途絶したことによる崇りを、陶邑に見つけた大神主大神の子孫オオタタネコが祭祀を継承することにより鎮めたとする前段と、オオタタネコを三輪山の神の子とする異類神婚譚の後段からなる伝説の基本的構成は変わらない。

神婚譚の最後に語られた箸墓が出現期の古墳であり、かつ、ヤマトトソモソヒメが邪馬台国の女王卑弥呼に比定されることから、この伝説は多くの考古・文献史学者に取り上げられた。が、私はそれには関心がなく、神と人との交わり、巫女による神祇りの原初的な姿が、動物と人との異類神婚譚で、しかも、幽玄的に語られていることに強

く惹かれた。

三輪に通う

「三輪山」祭祀を研究するとなると、『記』などに記された文字史料だけでなく、山中、山麓出土の土器、玉、模造品など祭祀遺物の考古資料も調べなければならない。大神神社の宝物収蔵庫には、神社に寄贈された絵画、陶磁器、刀剣などの美術工芸品とともに、山中、山麓出土の祭祀遺物が展示されている。

初めて、宝物の展示室に入った時、私の目を引いたのは、山中から出土した多くの須恵器であった。それを見ながら、どうして、三輪山からこんなに多くの須恵器が出るのか、もしかしたら、三輪山祭祀を継承したオオタタネコが須恵器を焼いていた陶邑から出たとする伝承と何か関係でもあるのか、と「妄想」をたくましくし、漠然とではあるが、三輪山伝説と山中出土の須恵器を絡め、何か歴史が語れるのではないか、と思った。

そこで、滝口先生の紹介状を手に、私は日本の神信仰を考古学的手法で研究する神道考古学の講座を持つ国学院大学の樋口清之先生の研究室を訪ねた。ベストセラー『梅干と日本刀』から「うめばし博士」の異名をもつ樋口先生は三輪山の麓に生まれ、三輪山の祭祀遺跡も調査した三輪山研究の第一人者である。私が「三輪山伝承の陶邑と山麓出土の須恵器を結び付けて、三輪山祭祀を考えてみたいのですが、……」と話を切り出すと、樋口先生は穏やかな口調で「確かに、三輪山からは須恵器が特徴的に出土し、そのあり方は特異である。やってみなさい」とおっしゃられ、「資料が見られるように神社の方には私

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

から話しておきます」とも言っていたのだ。

樋口先生のこの言葉を受けて私は「これはやらなくちゃ」、「学部時代と同様、文字史料とモノ資料でもって歴史が語れる、これはいける」と確信した。それからというもの、私は、新幹線と近鉄を乗り継ぎ大神神社に通い、伝承の地の三輪を歩き、収蔵庫内の須恵器を観察し、東京では『記紀』その他の三輪山祭祀に関する史料、論文を読み漁り、約一年かけて、次のような修士論文にまとめた。

三世紀末、三輪山麓に誕生した大和王権はその初め三輪山を祀っていたが、王朝が交替して祭祀が絶えた、そこで、五世紀になり、新王朝が祭祀を再開するにあたって、当時、朝鮮から渡来し、最新の焼物技術でもって和泉国陶邑で須恵器を生産していた工人集団に祭祀を継承させた、その氏族がオオタネコを祖とする三輪氏である、また、神の妻とは巫女のことなので、神婚譚は、陶邑集団が集団内の娘を巫女として三輪の神を祀らせたことの神話的表现である、と（一九七五年一月提出修士論文『三輪氏の基礎的研究』主査滝口宏、副査水野祐・久保哲三）。

王朝交替論を取り入れたのは、いうまでもなく、水野先生の影響が大きかったからと思う。私は三輪山祭祀を継承した陶邑出身のオオタネコとは朝鮮半島から渡来した技術者集団の系譜をひく人で、その人を祖と仰ぐ古代の三輪氏、鴨氏もその限りにおいて、朝鮮渡来の集団の末裔と考えているが、これはいまだに支持されていない。

私の研究はこの三輪山研究から始まったといつてよい。文字史料とモノ資料を用いて、祭祀、信仰、伝承を考えるもので、この研究は、

大学院を中退し、早稲田大学文化財調査室（以後、文化財調査室、または単に調査室と記す）を経て本庄高等学院に職を得た後も続けた。祭祀遺物では子持勾玉、祭祀遺跡では韓国全羅北道の海岸部で日本式の祭祀遺物を出土した竹幕洞遺跡にも及んだ。

子持勾玉について

三輪山とその周辺から古墳時代の特異な祭祀遺物である「子持勾玉」が出土している。大神神社収蔵庫にも数点展示され、三輪に通いだした時から気になっていた。

子持勾玉は滑石、蛇紋岩など柔らかい石を用い、本体と思える勾玉の背、腹、脇に同様の小型の勾玉を削り出したものである。本体を親、本体に削り出された小さな勾玉を子と見立て、次々に玉 \parallel 霊が生まれる様子を表したもののか、はたまた、子の玉が親に取りつく様子を表したもののか、子持勾玉と呼ばれている（写真2）。

古墳時代には実用の器物を滑石で模造品を作り、祭祀に供すること



写真2：子持勾玉（静岡宮ヶ崎出土
『子持勾玉資料集成』より）

がよくあった。そこで、この子持勾玉もそうした模造品の一つかなとも考えられるが、元になるモデルがない。祭祀に用いられた道具ではあるが、異様な形をし、何を表したものかわからず、「考古学上のスフィンクス（謎）」とも呼ばれていた。「謎」に挑むという大それた考えはなかったが、古代人がその異様な形に託した思いを知りたく、少しく調べることにした。はじめは大神神社に展示する五顆だけを検討しようと思っていたが、秋田から鹿児島まで四〇〇顆を超える出土が確認されているので、全体像を知る必要を感じ、各地の子持勾玉をも調べることにした。その結果、子持勾玉について得られた形態、時期そして意味などの知見は以下の通りである。

形態については、沖ノ島出土の子持勾玉を分類した佐田茂さんの考えをヒントに、親の形と子の作り方に注目し分類を行った。その結果、親は頭尾部の形から切断型、丸型、角型をⅠ、Ⅱ、Ⅲに分け、子は個々独立して親の体から彫りだされたタイプから親の身を刻んで表したものでa、dに分けた。親のⅠには子のa、b、親のⅢには子のc、dが多いので、Ⅰaタイプを基本形、Ⅲdタイプを退化形と考え、これで編年を検討したが、そう上手くはいかず、五世紀半ばの遺跡からⅠaとともにⅢbなども出土している。意外と近畿や西国よりも、関東に基本形が多いので、今は形態の相違は地域の特性を語るものと考えている。

異様な形の意味は、親にしろ、子にしろ、基本形が勾玉を表現していることは間違いないので、勾玉が玉_Ⅱ霊を生む、次からつぎと霊を生成する呪的な世界を表現したものと考えてよい。それでは何に使わ

れたのか。

天皇権を象徴する三種の神器の一つ、八尺瓊勾玉（ヤサカニノマガタマ）が子持勾玉ではないか、という意見がある。「サカ」は鶏冠（トサカ）の「サカ」で、突起を意味し、八尺瓊勾玉とはブツブツといくつもの突起が出ている勾玉の意である、と。たしかに、いくつもある勾玉のなかで、突起を持った勾玉はこれしかない。けだし、明察である。『記紀』などでは、三種の神器の草薙剣、八咫鏡は唯一一つしか存在しないが、八尺瓊勾玉は複数存在している。しかも、地方王権との絡みの中で語られているので、私はひそかに、この子持勾玉とは、もとは地方王権の継承儀礼などで使われた祭祀器物であったが、のちに服属の象徴として、三種の神器に加えられたのではないか、と考えている。

このように、三輪の研究は須恵器から子持勾玉へと続いていったが、三輪の研究で忘れてはならないのが栃木県埋蔵文化財事業団の篠原裕一さんである。子持勾玉の研究で知り合った篠原さんは神道考古学を極めるために、神職の資格を取り、文化財調査の傍ら神職も務め、宗像沖ノ島の世界遺産登録にも尽力された方である。三輪の祭祀遺物の調査においては、数日、ご協力をいただいた。感謝申し上げます。

大学院生の時、三輪山の麓にある老舗旅館大正楼に泊まり、大神神社に日参し、宝物収蔵庫脇の管理棟で、蚊取り線香の香りをかぎながら神社所蔵の須恵器を実測した。また、本庄学院に勤めてからおこなった大神神社の祭祀調査では、秋の酒まつりで麴の香をポンプンとさせた新酒の濁り酒をいただいた。少しく酸味があり、かつて「高橋

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

邑の活日」の醸した酒もこうであつたかと思わせるほどに、それは実に旨く、まさに歌にも詠まれた「三輪の味酒（うまさけ）」であつた。その他、繞道祭、御田植祭、鎮花祭、三枝祭など三輪の調査はすべてが忘れられない思い出で、三輪は私の故郷の一つになった。大神神社文教課の一本穀さん（笠坐神社）、佐藤文正さん（故人）、森好央さん（石上神宮）、山田浩之さん（現職）らには大変お世話になった。心から感謝申し上げる。

三 陶（すゑ）に魅せられ

（1）焼物に傾く

造形実習室

三輪山の祭祀を追いかけて、須恵器を眺めているうちに、もともと焼物好きであつた私は、須恵器という焼物に魅せられていった。轆轤で成形し、窖窯の中で一〇〇〇℃を超える高温、しかも空気を遮断した還元焰で焼く。そのため、堅牢、緻密でガラス質の質感と、灰黒、灰青の色調が得られる。時に、ビードロの自然釉が流れ、均整のとれたその形は芸術的でさえある。

それまでの日本の焼物とはいえば、粘土を紐状にして積み上げて形をつくり、八〇〇℃以下の焚火のような野焼きで、常に空気が補給される酸化焰で焼いた。その結果、色調は鉄錆にも似て茶褐色で、脆く、まるで素焼きの植木鉢のようである。

造形美としての縄文土器の素晴らしさは認める。だが、轆轤、窯を使うという点において、やはり、須恵器は違っていた。朝鮮より伝わっ

た須恵器生産の技術は日本の焼物文化を一変させたといつてよい。

一九七〇年代の半ば過ぎ、文学部の片隅に大学院の美術史・考古学共通の実習施設として轆轤数台と電気窯を備えた「造形実習室」がつくられ、文学部東洋史学科を卒業した陶芸家の永見鴻人先生が指導をされていた。焼物好きで須恵器への関心が高まっていた私は後期課程に進学するとこの実習室に毎日のように通い、永見先生の指導の下、轆轤を回し、焼物をつくった。今にして思うと、「いざれ須恵器を復元してみたい」という思いが湧いてきたのはこの頃であつたか。

本庄が勤務地になると、必然的に文学部の造形実習室とは縁遠くなつた。が、一九八三年に、本庄学院に勤めることになると、思いがけなくも、学院では美術で陶芸を扱い、校舎内に轆轤と灯油窯が備えられていた。ここに、再び、私は焼物と関わることとなつたのである。

授業の合間を縫って、私は、轆轤を挽き、文化財調査のない土・日曜日には、調査の終わった遺構の窪みを利用して野焼きの実験をおこなつた。これにより、縄文・弥生土器、土師器など、八〇〇℃以下の低温による土器焼き＝野焼きの基礎的知識を理解することができた。

点火後、しばらくは、温度が低いため燃料の薪、藁などは燻り、不完全燃焼により煤（炭素）が発生する、土器の表面はその煤を付着して、黒くなる、しかし、やがて、温度が上がり炎を上げて薪などが燃えだし、完全燃焼になると、土器表面の煤は徐々に切れ、土器は明るい橙色の色調に変わり、煌々とした熾が維持されるなか、土器が焼かれる、という原理である。

野焼きではこの現象が目の前で展開される。しかし、小さな色味栓

でしか中が覗けない灯油や電気の窯では、この現象を目で追うことはなかなか難しい。そこで、大きく開かれた薪窯の焚口など開口部から炎がどのように変化し、作品がどのように焼かれていくのか、窯内の変化を確認してみたいという衝動に駆られた。そもそも、歴史的には須恵器はもとより、それ以降の焼物はすべて、薪窯で焼かれた、それなら薪窯を知らないとは、焼物を語ることはできない、窯に薪をくべて、本格的に焼物を勉強してみたい、という思いが強くなって来たのである。

本庄に窯を築く

一九八五年、数名の教員で教育と研究で使う「窖窯」の構築を大学に申請した。期待はしていなかったが、なんと、翌年から二年間で三五〇万円を超える研究費が認められたのである。後になって、当時、教務部長として研究費配分の責任者であった奥島康隆先生から、窯構築の研究費は、本庄学院だけでなく、文化財調査室を含め、今後本庄キャンパスにおいて展開する教育、研究に資することを期待したからである、という主旨の話を伺った。有り難いことである。これが本庄キャンパスに窯がつくられることになった経緯である。

構築する窯は、須恵器の復元も視野に入れて、トンネル式の窖窯とした。それは、焼成室がいくつも連なる連房式は築くのに手間がかかるということもあつたが、われわれの目指す焼物が、いわゆる釉薬をつけない炆器、焼締陶器であつたからである。炆器、焼締陶器の代表が信楽、備前などの中世陶器で、それは古代須恵器の系譜をひき、ともに窖窯で焼かれていた。

初年度は、窖窯の知識を得るため、今に焼締・中世陶器を焼く、信楽、伊賀、渥美、瀬戸、美濃、珠洲、越前、備前、丹波などいわゆる「中世六古窯」を中心に各地の窯場を廻った。実に多くの窖窯を見たが、その中で、全体的な形、焚口の広さ、煙道の長さ、焼締部床の口ストルなどから、信楽の高橋春斎氏の窯をモデルとすることにした。二年目の夏、約二月かけて、本庄キャンパス内に燃焼・焼成部あわせて、幅約二メートル、長さ約三メートル、平面イチジク型の半地下式窖窯を築いた。場所は、本庄学院校舎の設計者である穂積信夫先生（建築学、理工学部）と施設部（現…キャンパス企画部）との相談の結果、本庄学院の旧校舎芸術棟の裏とした。

まず、芸術棟の裏に広がる小高い台地の端部を階段状に掘り、砂を敷き詰め、かけやで叩いて、地盤を水平にし、そこにレンガを階段状に敷き詰めて、窯の床とした。次は、壁と天井である。合板と割竹で蒲鉾形の窯体の型を作り、それを先に作った窯の床に据え、左右の隅から型に沿って、両端の厚さが違う「せり」レンガを積み上げてゆく。積み上げたレンガが窯の天井部でアーチ状になるよう合わせる。そして、最後に、窯を焚いた時、熱と圧力で膨張し、天井のレンガがずり落ちないように、天井中心部の数か所に楔として最後のレンガを打ち込んだ。

こうして、本庄キャンパスに焼物研究の基盤が整った。築窯は初めての経験であつたが、素人ながらよくやったと思う。次の課題は、窯焚きに慣れることである。そこで、数年、信楽の赤土を使い焼締陶器を焼いた。

これにより、いわゆる、「あぶり」、「せめ」、「ねらし」という窯焚きの基本を知るとともに、窯焚きにおける煤切れ、薪投入ごとに繰り返される酸化・還元の原理、窯内の温度推移にともなう炎の色の変化など、窯焚きの基礎的知識を得ることが出来た。この窯焚きでの知見は野焼きで得た知見とともに、その後の私の研究において、おおいに役立つこととなる。

冬の夜中、わずか二五cmのレンガで隔てられた窯の内と外は別世界である。窯外は防寒具に身を包み、吐く息も白いが、窯内はまさに黄白色に輝く一二五〇℃の驚異の世界である。

薪を投入する。窯内温度が一時下がる。不完全燃料を起こし、発生した煤は炎とともに勢いよく窯内を彷徨い、後、数メートルの火柱となって、激しく、煙突から天空の暗闇に吐き出される。しばらくすると、煤が消え、完全燃焼となり、温度は一気に上昇する。煌々と燃える熾のゆらぎがガラス化した焼物の表面に映える。棚板に並ぶ作品は高温でまるで透けているかのようで、実に神秘的である。

もともと好きであったとはいえ、私が、これほどまでに焼物に傾斜していったのは、造形実習室にて永見先生と出会ったことにある。永見先生からは、焼物を作る技術はもとより、モノづくりに携わる心構え、焼物と文化、社会など様々なことを教えていただいた。晩年、先生は体調を崩されたが、須恵器の焼成実験をまとめた『世界の土器づくり』を出版した時は大変喜んでいただき、不自由な手で丁寧にしたためられたお手紙をいただいた。先生が鬼籍に入られて、一〇年ほど経つが、下井草のご自宅や上田の仕事場で、楽しい御酒をいただいた

ことなど、懐かしく思い出される。私の焼物の師は永見先生である。もっともつと教えていただいたかった。

（2） 須恵器を作る

失敗の連続

いく度か、窯焚きをして、二×三の窯で須恵器の還元実験をするのは難しいことが分かってきた。窯が大き過ぎるのである。今少し、少ない量を二四時間程度で焼ける、小さい窯が必要になった。そこで、前に築いた窯の北側に、先の窯の三分の一程度の窯を築いた。小さい分、熱の効率を考え、炎の滞留時間が少しでも長くなるよう、一度上にあがった炎が窯床の下に潜る倒焰式にした。先に築いた窯を大窯、新しい窯を小窯と名付けた。

実験を開始した当初、数回の失敗はあっても、須恵器の還元はそれ程難しくなく、「すぐ出来る」と思っていた。なぜなら、須恵器を解説する多くの書物には、判で押したように、「須恵器は、不完全燃焼をさせて煤を大量に発生させ、窯内を還元状態にして焼く」と記されていたからである。私は、その通りに焼いた。だが、……。

いくら焼いても須恵器の色調は得られなかった。灰黒色ではなく、どうしても茶褐色になるのである。「教科書」通りに焚いているのに出来ない。窯を開ける時は、当然のことながら、いつも「上手く、焼けてくれよー」と期待をもって開ける。しかし、「ああー、またダメだ」と落胆が続いた。何が原因で上手くいかないのか、その理由が分からず、窯開けのたびに、絶望感に襲われた。それでも、数年、「愚

直」にこれが続けた。

この間、須恵器の復元に関心を持つ仲間が集まってきた。余語琢磨さん（現…人間科学部）、大島誠さん（芸術家）らである。三人でいろいろ悩んだ。鉄の還元色である須恵器の灰黒色を不完全燃焼による煤の付着と混同することもあった。窯構造が悪いのではないかと考え、窯の一部を作り変えたこともあった。それでも、須恵器は復元できなかった。

貴重なアドバイス

あれこれ悩んだ末、毎日、窯場で焼物を焼き、酸化焰、還元焰の効果的な窯焚き操作を知り尽くしている窯屋の職人に話を聞くのが一番いいのでは無いか、と考えた。そこで、今に中世の珠洲焼（須恵器的色調の炝器）を復元している石川県能登半島の珠洲市に出かけた。

われわれの疑問に対し、珠洲焼の職人さんは「焼物の器表面の色調は火止め後の窯内の焰の雰囲気によって決まる」、「還元焰なら窯の密閉性に留意すること」という貴重なアドバイスをしてくださったのである。見れば、珠洲焼の窯はわずかの煤も逃さず、空気も入らないように、分厚いコンクリートで覆われていた。

そこで、この「アドバイス」を本庄の小窯で試した。最高温度に達し、「ねらし」を行った後に火止めをし、冷却過程で数時間、炎や煤が少しでも噴き出す亀裂、隙間を粘土で塞ぎ、可能な限り窯を密閉にして、還元操作を行った。

数日して、温度が下がり、泥で塗り固めた焚口のレンガを一つひとつ外していった。外光が差し込み、窯内の様子が少しずつ見えてきた。

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

果たしてどうか、期待と不安の中で、目を凝らして薄暗いなかを見た。燃焼部には薪が炭となって散らばり、その奥に、灰やほこりをかぶって白くすすけた作品が並んでいた。

少し、落胆した。が、その灰をかぶった作品を一つずつ窯から取り出し、灰を払い、水で洗うと、なんと、それはカチツと焼き締まり、熔けた灰が胡麻状に降りかかり、黒味の強いまさに鉄の還元色を呈していたのである。熱によりガラス化した表面が、光を受けて「輝」き、その質感、色調はまさに須恵器である。それを目の当たりにして、思わず、「出来たー、出来たー、やったあー」と大声で叫びたい衝動にかられたことを今でも覚えている。思い立って約一五年、やっと須恵器ができた。

小窯での成功後、それが偶然でないことを確認するため、大窯でも試した。結果は同じであった。心配性な私は、それでもこの方法が原理的に正しいのか、いささかの不安もあり、韓国で今も新羅土器を復元する慶州を訪ね、焼成法を確認した。一九九〇年代後半には数年、後でも述べる金海進礼の斗山窯で、釜山大学の学生と加耶土器復元の焼成実験を繰り返した。いずれも、冷却過程で、窯を密閉にし、還元操作を行っていた。

私たちが須恵器の実験を繰り返していた頃、各地で同じように須恵器の復元に取り組んでいる人たちがいた。そして、互いに、情報、データを交換していないにも関わらず、時間差はあるものの、ほぼそろって、復元に成功したという知らせを聞いた。世の中には、同時に、おなじ疑問を抱き、その解決を試みる人がいるものだな、と不思議に

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

思った。

須恵器を還元しようと思ったのは、先にも記したように「須恵器」の緻密な質感、灰黒、灰青の色調に魅せられたからである。鉄の還元色をした焼物を作ってみた、という思いである。それは出来た。しかし、この知見は、実は窯屋の職人さんたちは既に知っていたことで、彼らにしてみれば、なにも、目新しい発見ではない。われわれが知らなかっただけで、それを「できた、できた」と騒ぐのは、あまりにも恥ずかしい。

そこで、われわれは、余語さんの提案もあり、鉄が還元により黒色になる「理屈」はもとより、温度推移に伴う胎土に含まれる鉄の還元率、鉱物組成の変化など、高火度焼成における色調と質感の変化を理化学的に追いかけることにした。五×四センチの平たいテストピースをあらかじめ窯内に入れて置き、八五〇℃から一一五〇℃まで五〇℃ごとに窯から取り出し、それを岡山理科大学に依頼して、蛍光X線スペク



写真3：復元考古学特集号表紙
写真は復元した須恵器

トル分析などを行った。その結果、おおよそ、酸化、還元の効果が始まるのは九〇〇℃当たりからであることなどが確認された。これら成果は、還元実験の成果とともに、一九九九年から、各種学術雑誌、学会で報告し始めた（写真3）。

作る人の視点で

「教科書」通りに還元焰で焼いても、須恵器的色調を得られなかった。その理由はどこにあるのか。「須恵器は還元焰で焚く」と説く焼成方法は間違っていない。しかし、それでは焼けない。その理由は冷却過程の「存在」と窯の密閉についての認識がなかったことにある。

われわれを含め、多くの人は、窯焚とは最高温度に達し、数時間の高温維持である「ねらし」が終わったら、それで、窯焚は「終わる」と考える。酸化焰焼成の場合は基本的にそれで終了するが、還元焰の場合は、その後、すなわち、温度が下がっていく冷却過程でも作業は続くのである。しかし、残念なことに、これまで、この冷却過程とその「役割」について明確に指摘していた須恵器の「解説書」はなく、われわれも知らなかった。これが失敗を重ねた理由の一つである。

しかし、窯屋の職人は日々の窯焚きにより、「ねらし」後の作業の重要性を知っていた。とくに、冷却過程を還元焰で維持する場合、空気が窯の内に入らないよう、熱や乾燥などで亀裂が入った窯の隙間を丹念に塞ぎ、密閉性に細心の注意を払うのである。その噴き出す炎を閉じ込める作業は徹底していて、半端ではない。この過程における窯の密閉が不十分であると、窯内に空気が入り、土器表面の胎土の鉄分が酸化し、茶褐色になるのである。

韓国金海進礼の窯屋での話である。数日前に加耶土器の焼成を終え、温度も三〇〇℃ほどに下がっていた時、窯屋の人がわれわれに、黒くなった土器を見せようと、焚口のレンガを外した。その時、それを傍で見ていた同じ窯屋の職人、この人は耳が悪いため口が不自由なのだが、この人がワアワア言って、茶褐色をした焼物を指さし、身振り手振り激しく、「レンガを外してはダメだ」というような仕事をした。私はこれを見て、「そうか、冷却過程で窯内に空気が入ると焼物が赤茶けるから、やめろ」と言っているのだと思った。この温度では、空気に触れても土器表面は赤茶けることはないのだが、まさに還元焼成では「冷却中に空気を入れるな」といういましめを語るものといえる。

本庄に窯を築いてしばらくして、早稲田の大先輩である大川清先生とお話する機会があった。大川先生は国士館大学で教鞭をとりながら栃木県馬頭窯を築き、瓦、陶磁器の研究をしている窯業研究の大家である。大川先生は私に「佐々木君、君の須恵器研究、あれはダメだな。…、だけど、君は窯持って、自分で粘土をこねて焼物を作っているんだよね？それは研究において大事なことから、続けなさい。粘土もいじらないで、窯も焚かない人に焼物が分かるわけがない」という主旨の話をされた。今に思うと、まさに、この「作る人の視点」で研究するという姿勢が須恵器の復元に繋がったのだと思う。

いずれにしても、須恵器を還元することはできた。思い立って一五年は経過していた。しかし、本庄キャンパスでは須恵器の還元実験だけを行っていたわけではない。土器焼成の実験としては群馬県埋蔵文

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

化財事業団の桜岡正信さんとともに黒色磨研土器、赤色磨研土器の復元も行い、その成果を以て、一九九五年度には韓国釜山大学校博物館の客員研究員として、慶尚南道蔚山市下笠遺跡出土の瓦質土器、一九九八年には中国四川の宝墩遺跡出土の土器の焼成方法を分析した。エジプトにおける土器焼成の調査としては、二〇〇〇年に吉村作治先生（エジプト考古学）のプロジェクトで、本学院の教員斎藤正憲さんとエジプト先王朝時代の黒頂土器（ブラックトップ）の還元実験をした。その後、齋藤さんとは二〇〇一年のファイユーム、二〇〇三年のシーワなどエジプトオアシス地帯における土器製作の調査も行った。

なお、須恵器の復元に途中から参加してくれた大島誠さんが、須恵器復元の成功直後、にわかに体調を崩され、一九九七年秋、周囲の願いもむなし、他界された。いかにも若い。私より五歳若く、享年四二歳であった。大島さんは焼物の他、絵、書なども手がける総合的な芸術家であった。この後、韓国で展開することになる焼物研究も一緒に緒しかつたが、それは果たせなかった。誠に残念である。

（3）土器の色の意味と名の由来を追いかけて 土器の色

須恵器を還元して分かったことがある。それは、還元焰での焼成は酸化焰よりも温度が上がりにくく、時間がかかる、さらに、高温高压下での火止め、密閉作業は窯から飛び出す激しい炎との「戦い」であり、また窯内に充満した煤が隙間の空気と少しでも触れると、瞬時に炭塵「爆発」を起こす、など、手間がかかり、かつ、危険である、と

いうことである。

ここに、また疑問が湧いてきた。単に、同じ機能を果たす器を作るだけなら、手間がかからず、危険の少ない酸化焰で焼けばよいものを、どうして還元焰で焼いたのか、と。それは、手間がかかっても、危険であっても、還元焰で生まれる「黒い色」の器が必要だったからである。それでは、それほどまでに必要とされた須恵器の「黒い色」にはどのような意味があるのか。

われわれは多くのモノに囲まれて暮らしている。衣類、家具、食器、文具、書籍など、モノの無い暮らしはない。モノには必ず形と色がある。形はモノの用途と結びつくが、そもそもモノの色とは何を表し、どのような役割をもつのか。私はモノの色を次のように考える。

たとえば、日常生活で着る服の色は着る人の個人的「趣向」を表し、学校や会社の制服などの色は意識を統一し、他校、他社との差別化をはかる色であるが、慶事での華やかな色、凶事での黒い色は、「個」や「組織」を超えた、「社会」が求めた色と考えてよい。今日、入学式の会場を黒白の幕で飾ることはなく、好きだからと言って、葬式に赤い服を着て参列する人がいないのは、まさにこのことを物語っている。色とは、このように「個」を分け、「組織」を分け、そして儀礼という「社会」的空間を分ける、という特徴がある。

色の役割をこのように理解すると、須恵器の黒い色はどのようにに考えたらいのか。須恵器はその初め圧倒的に古墳の副葬品として遺体とともに埋納された。使われる場所は、葬送という非日常的な儀礼空間であった。日本の須恵器の「祖」ともいえる朝鮮半島の加耶土器も

はじめは同様な使われ方をした。したがって、須恵器の黒い色は、儀礼空間に相応しい色として、社会が求めた色と考えることができるのではない。

儀礼空間に彩色の土器を用いるのは古墳時代が初めてではない。これは、土器文化が始まった縄文時代にも、赤色磨研土器とともに黒色磨研土器があった。ともに、朱、炭、漆を顔料として丁寧に磨かれ、色だけでなく、その光沢は一般的な土器に比し、著しく鮮やかで異彩を放つことから、非日常的空間で使用された土器であることは一目瞭然である。弥生時代にも赤と黒の土器はあり、古墳時代に受け継がれたのが、赤の丹塗り土器と黒の須恵器であったのではない。儀礼空間を飾るこの赤と黒の器はその後、赤漆、黒漆として漆器に受け継がれたと考えられる。

古墳時代の赤と黒の器が、今日のように、赤が慶事、黒が弔事と区別されていたわけではない。当時、黒い須恵器とともに、赤い埴輪や朱がおなじ葬送という儀礼空間で使われていることを考えると、赤、黒ともに、同じ儀礼空間で使われた色であった、と考えるのがよい。時代が下っても、結婚式、葬式でも白い服が用いられたことから、今日のように、赤が慶事、黒が弔事と区別するようになったのは、かなり後のことではなからうか。

土器の名

ところで、須恵器を還元し、須恵器の色の意味を考えているうちに、焼物の名称が気になりました。そこで、改めてよく見ると、焼物の名には色を示す言葉が入っていることに気が付いた。たとえば、われわ

れは何気なく使っているが、青磁、白磁は古代では「大唐青・白瓷」、緑釉陶、灰釉陶は「青瓷（あおし）」、「白瓷（しろし）」など、色の名をもって呼ばれていたのである。

この「事実」に気が付き、ふと思った。もしかしたら、今日、何気なく使っている「土師器（はじき）」、「須恵器（すえき）」という名称にも色を表す意味があるのではないかと。そこで、これら二つの土器の名を調べることにしたのである。

古墳時代から奈良・平安時代にかけて日常の生活容器として使われた茶褐色をした素焼きの土器を今日、考古学では「土師器（はじき）」と呼んでいる。それでは、この「土師器（はじき）」の名の由来はなにか。『倭名抄』など古代の辞典や記録に「土師」はもとより「埴」、「土」の字を用いて記される一群の土器があり、ともに「はに」、「はにし」、「はし」「はじ」と読み、また、「土師器」を「波之乃宇都波毛乃（はじのうつわもの）」と訓じている。このことから、今日、考古学で用いる「土師器（はじき）」の名はこの古代の「土師器（はじのうつわもの）」の「はじ」からきているということは容易に想像がつく。

ところで、この古代の「はにし」、「はじ」の名に、色を表す意味はないのか。そう考えて調べたら、それほど時間もかからずに、まったく同じ訓で植物の「黄櫨（はぜ）」に出会った。古語で「土師」とおなじ「はじ」と読まれる黄櫨は染料としても用いられ、その色は蘇芳と混ぜて染めた色は茶味の強い赤茶色を呈す「黄櫨染（こうろぜん）」、茜草と合わせて染めた色は赤味の強い茶褐色を呈す「赤白櫨染（あかしらつるばみぞめ）」である。さらに、興味深いのは、こうして黄櫨

を材料として染められた色を「はじいろ」と呼び、特に、「黄櫨染」は天皇が祭祀を執り行う時に着る衣の色なのである。

ここまで、調べてきて、分かった。古代の文献に載る「土師器」の名「はじ」は黄櫨で染めた「はじいろ」からきて、「はじ（いろ）」のうつわもの」の意である、しかも、それは、祭祀儀礼を主宰する天皇が着る衣の色で、呪的で魔除けの意味を持つ色である、と。となると、古代の本来の「土師器」とは非日常的な儀礼空間に用いられた赤い色の器で、いわゆる今日考古学で呼んでいる、庶民が日常の生活容器として使っていた土師器ではなく、魔除けの丹、朱が塗られ、呪的な赤色土器、時に磨かれた赤色磨研土器なのではないか。このように考えると、今日、考古学で呼ぶ「土師器」は古代の文献でいう「土師器」とは別物ということになるのである。

一方、須恵器はどうか。今日、考古学で「須恵器」と呼んでいる土器は古代の文献では「陶器」と記され、訓は「須恵乃宇都波毛乃（スエノウツワモノ）」と呼ばれていた。このことから、考古学で使う須恵器は古代の「陶」の読み「須恵（スエ）」からきていることは言うまでもない。ところで、須恵の「恵」は、今はア行の「エ」で発音するが、古代ではワ行の「エ」であった。それではこの「スエ」とは何か、色とかかわる意味があるのか、そこで、いろいろ調べてみた。

残念ながら、管見の限りでは和語で「スエ」そのものに色とかかわることとはなかった。そこで、須恵器が朝鮮半島より伝えられたことを考え、朝鮮語に「スエ」を求めると、難なく「斗」≡鉄にたどり着いた。この「斗」の母音「ㅏ」は韓国語の発音では基本（単）母音の

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

「ㄱ」ではなく、複合（二重）母音で、日本語ではワ行の「エ」に当たる。ここに、「須恵」と鉄とが音韻的に重なったのである。

須恵器も考古学も知らない人が、私の復元した「須恵器」に接した時のことである。その人は、あまり関心がなかったようで、手に持つこともなく、遠くからチラッと眺めていただけであつたが、「これは焼物です」と私が言うと、その人は驚いたような顔をして「鉄器かと思つた」と、まじまじと見始めた。まさに、須恵の器とは鉄の還元色の器なのである。緻密で硬い質感も鉄に似る。須恵器とは「鉄のような器」ということになるのではないか。

須恵器の復元から焼物の色の意味を考え、さらに焼物の名称は色にちなむことに辿り着いた。その結果、本来の土師器は黄櫨で染色した「はじいろ」、須恵器は鉄のような器とする、考えに辿り着いた。が、この考えもいまだ支持を得ていない。

これまで、モノを扱う考古学世界においては、モノの形がもつぱら研究されてきた。が、モノには色もある。残念ながら、これまで、モノの色を正面から取り上げた研究はあまり無かつた。モノの色には、これまで思いもしなかつたテーマがいくつも隠れているのではなからうか。「色の考古学」は面白いと思う。

四 韓（から）を歩く

（1）韓との出会い

七〇年代後半の韓国

学部で日本史を学び始めた時から、日本の古代史を勉強すると、必

ず朝鮮半島の歴史が絡んできた。「魏志倭人伝」然り、「三輪山祭祀」然り、「須恵器」また然りである。そこで、古代朝鮮史の知識を得ようと概説書をいくつか読んでみたが、朝鮮史は舞台が広く、国家興亡も複雑で、本の中身がなかなか頭に入つてこなかつた。

そんな時、美術史の大学院に韓国から留学していた全起元さんを知つた。たしか、一九七六年の秋頃であつたと思う。先にも触れた造形実習室で、永見先生から一緒に焼物を習っていた同じ美術史の仲嶺真信さん（仏教美術、後の別府大学副学長）の紹介でお会いした。

いろいろ話をするうち、全さんは私の悩みを見抜き、「佐々木さん、韓国に行きませんか？行つていろいろ見ることに、始まることもあります」というようなことをおっしゃってくれた。全さんは軍隊を経験し、結婚して家庭を持つ、私より五つほど年上の「ヒョンニム（お兄さん）」である。「案ずるより生むが易し」で、私は全さんの提案に乗ることにした。もちろん、仲嶺さんも一緒である。

まったく、何の準備もせず、韓国に出かけた。にもかかわらず、全さんのお蔭でいろんな場所を巡り、いろんな方にお目にかかつた。仏教美術の権威黄壽永先生、韓国考古学の李殷昌先生等々。知識のなさも実にもつたいなかった。とりわけ、僥倖であつたのは、ソウルの南、利川陶芸郷を訪ね、後の人間国宝になる高麗陶窯の池順鐸氏にお目にかかつたことである。（写真4）

池順鐸氏は植民地時代、後に朝鮮陶磁の神様といわれた浅川伯教の助手を務め、解放後、韓国の陶磁界を牽引した人物である。人間国宝にもなろうという大家が、日本の学生に懇切丁寧に韓国の焼物の話を



写真4：左から筆者、池、全、仲嶺の各氏（利川高麗窯にて）

してくれた。池氏は、話を聞きながらも、もの欲しそうな顔をして、焼物を眺めていた私の心を察したのか、「好きなもの持って行っていいですよ」と言ってくれた。奥の棚に飾ってあった「満月壺」の異名を持つ大きな白磁壺が気になったが、小さな私は手前に置かれていた呉須で淡く秋草文を描いた白磁の小瓶をいただいた。現金なもので、これで韓国がいっぺんに好きになった。

韓国では日本で見られない風景をいくつも見た。百済の古都扶余の落下岩から見た白馬江の岸辺はまさに名前の通り花崗岩の風化砂で真っ白であった。慶州芬皇寺、仏国寺の石塔を見て、日本の木の文化に対し、韓国は石の文化であることを知った。ソウルから一步郊外に

出れば、農村は「セマウル（新しい村）」運動のまっただなか、新しいコンクリートブロックの建物が広がる農村に朝鮮伝統の藁葺の農家が点在する。鈴懸の並木が延々と続く田舎道をバスが砂塵を立てて走る。季節は三月末、寒いが、湿気が少なく、朝は清々しい。まさに「朝鮮」であった。

軍政権下で、防空訓

練、夜間外出禁止令などが厳しく、鈍色の剣の着いた自動小銃を持つ軍人に検問を受けるなど、緊張する場面もあった。が、街の雑踏、市場の喧騒など、韓国はまさに「漢江の奇跡」真っ只中で、人々は繁栄に向かって走っていた。団塊の世代に生まれ、六〇年代の経済成長のなかで育った私には何故か、懐かしく、軍事独裁の朴政権への思いとは別に、韓国に近親感を覚えた。初めての海外体験が韓国であったことに、今でも全さんには感謝している。

帰ってきて、自分の無知を深く反省し、とりあえず、韓国語学習から始めることにした。「ㄱ、ㄴ、ㅇ、ㄷ、ㄹ」など記号に似た独特な文字にも興味を持ったが、全さんに教わって初めて使った「タンベ イッソヨ（タバコありますか）」がタバコ屋のおばさんに通じたことが「うれしかった」のである。おばさんは首を横に振って笑いながら「オプスムニダ（ありません）」といったのだが、なぜか、外国語を話すという緊張感もなく、スムーズに会話が成り立ったことに、「あ、通じるんだ」と、なんともいえない「心地よさ」を感じたのである。

そこで、帰国後、当時、早稲田の大学院で韓国考古学を研究していた先輩から教えていただくことにした。しかし、「아、야、어、여、…」から初めて一月もしないうちに何故か、先に進まなくなった。語学は道具であり、どうしても習得しなくてはならない必要性があれば、一生懸命やるが、差し迫った目的がないと、自然と意欲が失われていく。韓国への関心を漠然と抱きつつも、それにどのようにチャレンジするか、具体的に何も考えていなかったのである。モチベーションの問題である。

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

そんな状況にもかかわらず、「ポストク」への不安もあり、指導教員の滝口先生に、韓国への留学を相談したことがあった。韓国語もできずにあまりにも無責任な「思い付き」で、先生には大変申し訳なく失礼なことをした、と今でも苦い思い出として残っている。その後は、韓国、韓国語を気にしながらも、それから遠ざかっていった。

「四〇」の手習い

学院に勤務しても、時間があると、私は、調査室で報告書作成などかつて調査した遺跡の整理作業を手伝っていた。調査室の「ボス」は、私より四歳年上の昆彭生さんである。

昆さんは学生時代に私立大学では初めて海外調査を実現し、シルクロードの西側地域（インド、パキスタン、アフガニスタン、イラン、イラク、トルコ）のジェネラル・サーベイを行った、「伝説」の人である。企画、立案、資金集め、関係役所への書類提出はもとより、「ほんとにできるのかよ?」といぶかる教員を説得し、総長を口説いて実現させた、行動の人である。調査室に勤務してもそんな昆さんの周りには、中国、エジプト、イラン、シリア、ペルー、インカなど外国考古学を志す多くの学生が集まり、活躍していた。

本庄学院に勤務して一〇年程経ち、須恵器の復元実験と格闘していた時である。昆さんがなかなか税（うだつ）の上がらない私を見て、「どうだ、佐々木、韓国語を勉強してみては……。なんなら一緒にやらないか」と声をかけてくれた。私も途中で「放棄」した韓国語が気にはなっていたが、「なんなら一緒にやらないか」という言葉に、「佐々木に韓国語を身に付けさせ、何とか一人前にさせたい」という

昆さんの思いを感じた。そこまで言われて、やらないわけにはいかない。私のかつての「韓国」への思いを覚えていくれたのである。

ちょうど、学院社会科に早稲田の東洋史に在籍する韓国人の申英秀さんが出講していた。そこで、申さんに講師をお願いしたところ、快諾を得た。こうして、週一、セミナーハウスの食堂で韓国語の学習会が始まったのである。受講生には佐々木、昆さんの他、学院の教科書を扱っていた一賞堂の茂木孝一さんも加わった。週一回では何とも心もとないので、私は毎朝ラジオ講座を聞き、その録音を、夜、犬を散歩させながら、声を出して復唱した。このせいか、わが家の初代の飼いい犬「コロ」は、「アンジャ（座れ）」、「キダリヨ（待て）」、「ソン（お手）」、「アンデ（だめ）」、「テッタ（よし）」など韓国語を少しは聞き分けることができた、と思っている。

韓国語学習会はそれでも半年は続いたであろうか。そのうち、メンバーも代わって、韓国考古学の文献講読会に変わったが、こうして、私の韓国語学習が再び始まったのである。当時すでに不惑を超えていて、まさに「四〇」の手習いであった。不思議とこれは続いた。

学生の時と違って、四〇歳で再開した韓国語学習が続いたのは、韓国語を使う機会をみずから作ったことにある。毎年春と夏の休みに、勉強会の人々と韓国へ出かけ、遺跡や博物館、大学を回り、遺物をながめた。早稲田の考古、東洋史の有志とも出会った。丁度、「八八（パルパル）オリンピック」の後で、韓国観光が盛り上がっていた時期でもあった。

そうした折、私も幹事を引き受けたが、韓国語を学習しているとは

いえ、いまだよちよち歩きで、いつも申英秀さんの後についていくだけである。しばらくして、これではダメだと思い、切符の手配、出入国の手続き、韓国でのバス・列車の乗り方、博物館の入場券の買い方、ホテルフロントでのやりとり、食堂での注文などを少しずつ覚えていった。旅行会社の添乗員のような仕事であるが、これができなかったら、いつまでたっても自分一人で韓国を歩き、調査、研究することはできないと思ったからである。

一九九〇年代の初め、釜山大学博物館を訪ねた時、日本から来た大学院生が研究員として、バリバリ活躍していた。私はその姿を見て、学生時代に無謀にも抱いた韓国留学への思いが甦ってきた。その院生は韓国語がペラペラなのだが、彼女の周りの韓国人は日本語を使っていた。逆に、勉強のため、日本語を使いたい韓国の学生も多かった。それを見て、これなら、研究の対象は遺物という物言わぬモノだから、韓国語がそれほどできなくても何とかなるのではないか、という思いが生まれてきた。

韓国の四季のなかで

その後、しばらく韓国へ通った後、一九九五年、四六歳にして、ついに、一年間の在外研究を果たしたのである。それは、申英秀さんとはもとより、申さんのお父さんである申国柱先生（元東国大学校総長）ご夫妻、鄭澄元先生（釜山大学校博物館長）、申敬澈先生（当時慶星大学校博物館長、後、釜山大学校博物館長）、全玉年先生（当時釜山大学校博物館研究員、後、尚州博物館長）など多くの方々のご厚意、ご協力のお陰と感謝している。

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

韓国に暮らし始めてすぐ、申国柱先生に挨拶するため、漢江を渡ったソウルの銅雀区にある御自宅を訪ねた。門の近くに警察官が数人警備していたので、「さすが、韓国。大学総長にも警備がつくのか」と思ったが、実は、路地を隔てて金泳三大統領の自宅があり、それを警備していたのである。

お目にかかって申先生は「一年間なのだから、勉強したって、大したことではない。それより、今後の研究のために、友達をたくさんつくっておいの方がいいですよ」と貴重なアドバイスをしてくれた。日本に帰った後の今後の長い研究生活を支えてくれる知り合いをたくさん作っておきなさい、ということである。私も、すでに四〇を過ぎ、若者のように、ガチガチに勉強することはできない、と思っていたので、申国柱先生のおっしゃることが、すんなりと理解することが出来た。

そのためか、その年は、一日も帰国せず、釜山に暮らし、韓国を見て回った。その国の歴史、文化、人の情を理解するには、それを培ったその国の地理、気候、風土を知らなくてはダメだ、少なくとも韓国の季節の移ろいを、韓国人とともに肌身で感じたい、と思ったからである。

韓国の学校、会社など日々の生活は新暦だが、旧暦も浸透している。釜山大の理学部の先生に「今年は八月が二度あるんですよ」と言われた時は、一瞬「？、何を言ってるの、理学部の先生なのに、……」と戸惑ったが、旧暦の閏八月があるということなのである。節気などの行事も旧暦なので、正月や盆は日本のように日にちが固定せず、毎年

変わる。旧正月の一日（新暦二月下旬頃）の夕刻、「タルマヂ（満月を迎える）」の祭りでは、海雲台の浜辺に松の木、枝を高く積み上げて燃やし、その周りを人々が踊りながら回る。日本の「左義長」、「どんど」などとおなじく、その年の息災を祈るのである。

梅雨は日本より短く、台風は少ないが、来ると激しい。釜山の夏の暑さを避けて、海雲台に行くと、リマン海流の関係か、空気はひんやりとして、海水も冷たい。八月下旬には気圧配置が変わり、秋風を感じ、一〇月には冬のコートが欲しくなった。大陸の冬の高気圧は日本よりも強く感じられ、宿舎の窓ガラスは釜山でも二重、一月末の最低気温は釜山で零下一〇℃、ソウルで同じく一七℃になる。不思議なもので、かなり温かい済州島にも本土なみにオンドル（韓国式床暖房）がある。民族文化の根強さを感じた。

錦秋を求めて、韓国人が必ず行く全羅北道の内臓山、江原道の雪嶽山にも出かけた。高速道路を走るバスに乗ると、運転席の後ろに「車内で踊らないでください」という注意書きが目立つように貼られていた。「何なんだ？」と思ったが、車窓から並走しているバスを見て、すぐ分かった。バスが激しく揺れている。これは危ない。カーテンは閉められていたが、踊っているのである。韓人（からびと）の陽気な一面を見た。

釜山大学の裏には露呈した花崗岩の奇岩が連なる標高およそ八〇〇メートルの金井山が控え、四季を求めて月に一度は必ず登った。真冬の金井山は昼でも零下一〇℃、湧き水も凍るほどに寒いが、黄色いケナリ（れんぎょう）、薄紫のチンダルレ（山つつじ）は韓人（からびと）に春

の訪れを知らせる。山の頂に立てば、晴れた冬の日には南に対馬がくっきりと見え、日本との近さを感じた。

韓国で一年過ごして得たさまざまな情報は本での知識以上に私の韓国理解の基礎となり、その後、学院の授業で活かされたことは言うまでもない。一四年後に再び釜山で暮らし、釜山も私の故郷の一つになった。

韓国に一年もいれば、韓国語が少しは上手くなるかと思っていたが、あまり上手くならなかった。周りに日本語を話す人が多く、ついそれに甘えて、韓国語を話さなかったこともあるが、基本的には記憶力と活舌の問題である、と思っている。耳にしたことのない音は舌で表せない。四、五〇年も日本語だけを聞いて過ごし、耳と舌が日本の音に「固まった」人が初めて聞く異国の音を表現するのは難しい。舌が動かないのである。語学は若く、耳と舌の「柔らかい」うちに学習すべき、というのはまさにこのためである。

（２）「金海窯」を尋ねて

金海進礼陶芸郷

一九九六年三月、釜山での一年間の研究を終えて帰国する直前、加耶土器の焼き方を確認すべく、申敬澈先生の案内で慶尚南道金海市進礼面にある斗山窯を訪ねた。斗山窯は、金海市より「加耶土器復元業者」に指定された窯元である。

窯主の姜孝鎮さんは還元焰土器の焼き方を丁寧に話してくれたのだが、この時、私にいつもの悪い癖がでた。焼物好きな私は、失礼なが

ら、主人姜さんの話に耳を傾けつつも、窯場の一角で、白土を使って象嵌、刷毛目、粉引などの粉青沙器を作る職人の作業に見入ってしまった。粉青沙器とは「三島手」として日本の陶磁文化に大きな影響を与えた朝鮮陶磁の技法である。その技法が今、目の前で展開している。私はその光景に少なからざる興奮を覚えた。

それから間もなく、釜山大の考古学科がこの斗山窯に実験実習室を開設した。そこでは毎年春と夏に、三泊四日の日程で、合宿形式の伽耶土器焼成実験が行われることになり、私は須恵器の焼成技法を確認するため、しばしば、この焼成実験に参加した。学生と一緒に窯を焚くのだが、焼物好きな私は、その合間に、斗山窯はもとより進礼の他の窯屋の作品も見廻った。

進礼ではどの窯屋も粉青沙器を中心に生活陶器を生産していた。これにより、粉青沙器の成形、装飾、焼成などの製作技術はもとより、進礼陶芸郷の生産体制、経営形態、さらに売れ筋の製品などを知ることができた。ここで見聞きしたさまざまな知見は韓国の焼物産業、焼物趣向、焼物文化を考えるうえで、私の大いなる財産となった。

毎年、進礼をまわるうちに、あることに気が付いた。それは、訪れるたびに窯屋の数が増えていることである。一九九〇年代の末から二〇〇〇年代にかけて、地場産業の発展を背景に行政の支援もあり、「クレイアークキメミュージアム」、「粉青沙器陳列館（現・金海粉青陶磁館）」が建てられ、毎年秋には陶磁器祝祭も催され、韓国を代表する陶芸郷の様相を呈してきたのである。こうした、進礼陶芸郷の発展ぶりを目の当たりにして、私はその成り立ちが気になり、斗山窯の主人

に「この村の粉青沙器生産は、どのような経緯で、いつから始まったのですか」と尋ねてみた。

当初、私は、韓国最大の陶芸郷である利川、広州、驪州などの京畿道の窯場から、いつとはなしに一人またひとりと陶芸家や職人が入郷し、現在のような陶芸郷に発展したものと思っていた。しかし、姜孝鎮氏は意外にも次のような話をした。「この進礼で粉青沙器生産が始まったのは二〇数年前（一九七〇年代後半）、日本の益子（栃木県）にいた画家合田好道と在日韓国人金春植が合弁会社「金海窯」を立ち上げたことによる。金海窯は、今はないが、…」と。

私は、その話を聞いて、初めのうちは「そんなこともあるんだあ」とそれほど気にも留めないでいたが、しばらくして、「ええ、そんなことであるの?」と、驚きとも戸惑いともつかない思いにとらわれてきた。

一海を隔てて隣接する日韓の間には、二〇〇〇年を超える様々な技術、文化の交流の歴史がある。交流といっても、そのほとんどが「韓国から日本へ」の伝来が多く、焼物はその最たるもので、古代の須恵器、近世の高麗茶碗、西日本の萩、唐津、薩摩など多くの焼物技術や文化が日本へ伝えられた。しかし、今、目の前で展開している韓国進礼の焼物は日本人がはじめたという。これは、これまでの技術や文化の流れとは逆で、「日本から韓国へ」という極めて稀有で、特異な例なのではないか、と。

しばしば、韓国の陶芸郷をまわるたびに、韓国人から言われたのは、韓国は須恵器、青磁、粉青沙器、白磁と優れた焼物文化を誇った、日

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

本はそれを受け入れ、発展させたが、秀吉の侵略により、韓国の焼物は廃れてしまった、と。私はこの話を聞いたときに、肩身の狭い思いをしていた。が、いま、目の前で展開している進礼陶芸郷の成り立ちには日本人が関係した、というのである。これは驚きであった。

益子の民藝、海を渡る

さらに、私を惹きつけたのは、合田好道なる人物が進礼に入る前に栃木県益子にいた、ということである。幕末から藩主への献上品とともに一般大衆向けの甕、土瓶など生活雑器を生産してきた益子は、柳宗悦とともに民芸運動を展開した濱田庄司が入郷した陶芸郷である。

濱田の活躍もあり、益子は民芸陶器の故郷として東日本を代表する陶芸郷に発展した。戦後、この益子に入った画家の合田は独特の絵付けで、陶芸を志す益子の若者たちに大きな影響を与え、濱田に劣らぬ評価を得ていた。こうした日本の民芸を代表する益子、その益子を代表する合田が、進礼に窯を築き、焼物を始めた、というのである。

合田が進礼にいたのはわずか六年である。この六年で合田はここ金海窯で、韓国の職人と協働して、象嵌、刷毛目という朝鮮由来の技術を用いて焼物を作った。合田が作ったものは、「家庭食器を美しく」という民芸の思いのもと、これまでの地味な朝鮮陶磁には無かった、赤絵など鮮やかな色彩と斬新なデザインを持つ焼物であった。とくに、白土の刷毛目の上に、赤絵で描いた「チェビッコ（すみれ）文」は金海窯の代表的文様となった（写真5）。私は、これは朝鮮陶磁の復元、模倣などではなく、益子の民芸という衣をまとった韓国の新しい焼物ではなかったか、合田の金海窯での作陶は海を越えた民芸の展



写真5：合田の金海窯作品
徳利中央に赤絵のチェビッコ文が下向きに描かれる

年々、窯屋の数が増えている、これは日韓の焼物交流に関心を持つ日本人としてはその由来と現状、これを、何としても記録し、何らかの形で後世に残す必要がある、と痛感したのである。

一九九八年から、金海進礼陶芸郷の調査を始めた。当初、私は、合田が韓国に伝えた象嵌技法、デザイン、文様など技術的影響に限って調べようと思っていたが、進礼を訪ねるたびに窯屋が増え、しかも、どの窯屋も競うように色彩豊かな茶器や日常の生活食器を生産するさまを見て、合田は韓国の陶磁文化の発展にも大きな影響を残したのではないか、と思うようになった。そのため、益子焼や柳、濱田らの民芸論、合田の生涯、金海窯の生産、現在の進礼陶芸郷の焼物生産まで調べることにしたのである。

柳、濱田、民芸については多くの文献があるが、合田についてはわずかで、金海窯に至っては皆無である。そこで、合田の足跡を追いかけて、栃木県益子、韓国進礼、合田の故郷香川県観音寺はもとより、合

開であったのではないかと考えるようになった。

日本人が携わり、日本の民藝を継承する陶芸郷が韓国にあり、それが

田が幼少時に暮らした韓国興海をも訪ねた。濱田に関しては、バーナード・リーチと築いたイギリスのコーンウォール半島の突端、セント・アイビスの窯場にも出かけ、「リーチポタリー」に残る浜田の作品を確認した。

益子では、和田安雄さんのお世話になった。和田さんは、戦中生まれで、初めて伺った時は六〇歳前後である。合田とともに金海進礼に渡り、焼物を作り、帰国後も、二〇〇〇年に合田が亡くなるまで、公私ともに献身的に合田を支えた人で、私を合田ゆかりの場所に案内し、合田と交流のあった人々を紹介してくれた。

正宗寺（北寺）住職の井上瑛人、陶芸家木村一郎の長女木村滋子、元益子町長の平野良和、合田が益子に入るきっかけとなった明石謙吾の子息明石庄作（陶工房）、合田を支え続けた塚本央・倫行親子（陶庫）、濱田庄司の孫濱田友緒（益子参考館）、佐久間藤太郎の孫佐久間藤也（佐久間藤太郎窯）、合田の支援者で友人の石塚全（建設業）等々。

これら合田を知る方々から伺った話は合田の足跡、性格、技術を知りうえて、極めて貴重な話であったが、和田さんの語る金海窯の話は誰も知らない、まさに、かけがえのない金海窯の「一級資料」であった。進礼そのほかで得た合田や金海窯の情報をもって益子を訪ね、和田さんに確認していただく、そんな調査が一〇年近く続いた。和田さんはまさに「金海窯」の生き字引であり、「語り部」であった。

進礼を歩く

こうした調査を続けながら、ふと、思った。合田が金海進礼で焼物をはじめてこれまで三〇年が経つ、金海窯は閉窯し、合田も亡くなっ

たが、合田と一緒に焼物を作った韓国人の職人たちはまだ進礼にいるのではないか、これまでのような、進礼を訪ね、数時間チョコ、チョコと調べるのではなく、じっくりと腰を据えて、進礼の窯屋を一軒、一軒、調査すれば、合田が残した影響、痕跡に出会えるのではないかと。

そこで、二〇〇九年度の一年間、再び、釜山大学校博物館のお世話になり、進礼の調査を行うことにしたのである。一九四九年生まれの私は齢六〇、ちょうど還暦の年であった。が、自分の「体（健康）」を気遣うよりも、「思い」の方が勝っていた。

毎週、月曜日の朝、釜山大の宿舎（桑南国際会館）を出て、西面で地下鉄を乗り換え、バスで洛東江を越え、約二時間かけて進礼に着く。それから金曜日までの五日間、斗山窯の離れに寝泊まりして、進礼の窯屋を廻る。進礼は南北約六km、東西約三kmで、周囲を小高い山に囲まれた三日月形の小さな盆地で、この中に七〇軒ほどの窯屋が点在している。窯屋は集落ごとに数軒のブロックにまとまっているので、今週はこの地区、来週はあの地区と、調査予定を組み、一軒、一軒、地図を頼りに窯屋を訪ねた。一日一〇km以上は歩いたであろうか。

斗山窯主人の実弟、姜孝龍さん（ソナ陶芸主人）に紹介され、かつて金海窯に勤務し、現在も進礼に暮らす人々も訪ね、話を聞き、貴重な資料を見せていただいた。金海窯に関係していた何軒かの窯屋ではかなり変容した合田のデザインを作っていたが、芸大や美術学校を出た新しい窯屋の作品に合田の面影を見つけることはできなかった。「ああ、合田の面影はもう進礼には残っていないんだなあ」と思う日

が続いたが、調査を始めて二週間が過ぎた頃、ある窯屋でなんと「合田」のとそっくりな赤い「チェビッコ文」を描いた碗、カップを見つけたのである。これは驚きであった。

自分で決めたとはいえ、なかなか、「合田」に巡り合えないと、「俺は一体何をやってんだ、還暦の男が、異国で一日一〇km以上も歩いて、馬鹿じゃないの」と愚痴も出始めていた。が、合田のとそっくりな赤い「チェビッコ文」を見て、その思いはいつべんに吹っ飛んだ。「これに会いたかったんだよ」と叫びながら、頬ずりしたくなった。苦労が報われた瞬間で、カチッと灰黒色に焼けた須恵器を復元した時と同じ感動を味わった。

調査を行ったのは四月、明け方はオンドルを焚くほど、まだまだ寒いが、昼の陽ざしは心地よく、訪ねた先の窯屋の主人は茶を入れて、私を労い、自らの焼物を語った。狭い村である。どこからか、「年取った日本人が歩いて窯屋の調査をしているらしい」という噂も流れていったらしい。

ある窯屋を訪ねた時、「アンニョンハセヨ、オヌブニケセヨ（こんにちは、どなたいらっしゃいますか）」と尋ねると、「オー、ワッタ（おー、来た）」といって歓待してくれ、昼飯まで食べて行け、という。もちろん、ご馳走になった。進礼の人々の優しさに支えられた実に楽しい調査であった。自分でもよくやったと思う。

韓国の恩に報いる

二〇一六年二月初め、合田の命日にあわせ、これら調査をまとめて、『韓国の焼物の恩に報いた日本人 合田好道 益子から金海進礼への民

藝の展開』と題し、桜美林大学北東アジア総合研究所（現…一般財団法人アジア・ユーラシア総合研究所）から出版した。そこでは、まず、金海進礼の粉青沙器生産の原点となる益子焼と柳宗悦や濱田庄司らの民芸論を通覧し、ついで、合田好道の幼年期から金海に渡るまでの一所不住なる半生を記し、さらに、金海窯時代を中心に、帰国して益子で亡くなるまでの合田の後半生を述べ、最後に、合田帰国後の進礼陶芸郷の発展、今も残る合田のデザインなどを紹介し、進礼だけでなく、韓国陶磁史、陶磁文化に与えた合田の影響について、私なりの考えを述べた。

一九七七年に初めて韓国を訪ねた時、人々は食堂でも、自分の家でもアルマイトの食器で食事をしていた。器がぶつかっても、金属なので壊れることはないが、凸凹し、変色し、それはいささかみすばらしく感じた。それが、「漢江の奇跡」という驚異的な経済の発展により、生活文化が向上し、一九九〇年代から徐々に、耐熱ガラス、白磁、そして色彩あふれる粉青沙器に代わっていった。コーヒー、茶などの嗜好飲料の普及もその器としてカラフルな焼物生産を促した。進礼の窯屋が年ごとに増えていった理由もここにある。

私は、こうした一九九〇年代後半の韓国で、カラフルな焼物が出現してきた背景に、その昔、金海窯で「家庭食器を美しく装う」という益子民芸の考えのもと、韓国人と「協働」して色彩感あふれる粉青沙器を作っていた合田の影響があるのではないかと考えている。

合田は金海進礼で作陶していた時、機会あるごとに、「（日本が）韓国から（長い間に）教わった焼物の文化や技術（の恩）を私なりに金

海窯を通して返し（報い）たいんだ」と語っていた。拙著『韓国の……』のタイトルに「焼物の恩に報いた」を入れたのは、まさにそうした合田の思いを表現したかったからである。それでは、合田は何をもってこの恩に報いようとしたのか。

私は、それはこれまでの地味で、味気ないアルマイトという韓国の食器を色彩あふれる焼物に変えることで報いようとしたのではないかと、思う。それはまさに益子の海外展開であり、日本の民芸の「ころ」を伝えることであつた。

拙著の内容はどうしても、焼物の話が中心になるが、私としては、幼少期、青年期と植民地朝鮮で暮らし、日韓条約締結後に渡韓して金海窯を立ち上げた合田の朝鮮、韓国に対する思いをも感じ取ってほしい。合田好道という一個人を通して見た、日韓関係史でもある。

益子を関東一の陶芸郷にするのに大きな役割を果たしたのは濱田庄司である。と、同じように、金海進礼が韓国を代表する陶芸郷になるのに大きな影響を与えたのは合田好道と思う。私の頭の中で、金海進礼と益子、合田好道と濱田庄司が重なっているのである。

合田が進礼金海窯で作ったものは韓国の粉青沙器である。そこで、粉青沙器を知らないと話にならないと思い、五〇歳になる前、約一月、進礼の斗山窯に泊まり込んで、粉青沙器を作った。進礼には朝靄が立つ。その朝靄を突いて、昔懐かしい「ピープー」という、少しく寂しげなメロディでラッパを吹きながら豆腐売りが来る。その豆腐で窯屋の奥さんが作る真つ赤なチゲを職人とともに食べ、粘土を捏ね、白土を塗り、窯を焚いた。私にはこうした窯屋の生活を体験することで、

文献からは得られない、何かが得られるという思いがあつた。進礼での調査は足掛け一五年を数え、ここに、また一つ故郷ができた。

二〇一六年二月、益子「つかもと」のホールで、拙著の出版記念パーティがもたれた。その時、金海窯の「語り部」である和田さんは体調不良をおして出席された。少し、辛そうな和田さんを見て、心配になったが、その後回復し、翌年二月の合田の命日に、益子の「陶庫」さんでお目にかかった時は、御酒も進み、笑う顔が赤く、少しく、安心した。が、それも一時で、出版から二年後の二〇一八年五月、和田さんは突然、亡くなられた。

「自分」を主張することもなく、口数も少ない、穏やかな性格の和田さんであつた。もう少し、話が聞きたかつた。先に焼物の師永見先生、ついで須恵器を復元した仲間の大島さん、そして今、和田さんを亡くした。人の世とは「ままならないものだなあ」とつくづく思う。まことに残念である。それでも、拙著ができた時は大変に喜んでくれた。今頃は彼岸で、合田と本を眺めて、思い出に耽っていることであらう。

益子の調査では、栃木県埋蔵文化財事業団の進藤敏雄さんにもお世話になった。進藤さんは私と同じく永見先生から焼物を習った「同窓生」である。栃木県小山の自宅に窯を持ち、その腕はプロ級である。釉薬の知識の乏しい私にはおおいなる助けとなった。心より感謝申し上げます。

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

（2）そしてオンギに辿り着いた 甕の国

一五年ほど前のことである。仏跡を訪ねて慶州の南山周辺を歩いていると、民家の軒先に何か見覚えのあるものが吊るされていた。私の記憶にあるものは丸い形をしていたが、それは四角であった。家の庭先には、地面より一段高く設けられたチャンドツテ（醬甕台）という石を敷き詰めた平らな台の上に、茶褐色の釉がかかった甕や壺、甑が大きさ、高さを勘案されて、並べてあった（写真6）。後で分かったことだが、軒先に吊るされていたものは韓国では「メジュ」という、いわゆる味噌玉で、その家に「棲む」菌を付着させ、庭先の甕で発酵、醸造、貯蔵し、代々その家に受け継がれた味の味噌を作るというのである。



写真6：水原民俗村のチャンドツテ

これら甕や壺、甑はオンギと呼ばれ、特に甕は味噌だけでなく、醤油、キムチなどの発酵、醸造の容器として使われ、まさに、韓国人の食生活と深く結びつく焼物なのである。甕の多さは家族の多さ、しいては家の勢いや繁栄を表す、という。このような光景はいかにも韓国的で、韓国

が別名「甕の国」といわれる所以である。

韓国人に「韓国を代表する焼物は何ですか？」と尋ねると、当然のことながら「それは高麗青磁に朝鮮白磁でしょう」という答えが返ってくる。ある面これは正しい。美術工芸面では、確かには青磁、白磁は韓国を代表する陶磁である。それでは、「その白磁はどこに行けば見られますか」と尋ねると、「博物館に行ってください」と、そっけない答えが返ってくる。日頃、一番目にし、食生活で世話になっているオンギは彼らにとって、韓国を代表する焼物ではないのである。

韓国で青磁、白磁を語る書物は多いが、甕、壺のオンギを語る書物は極端に少ない。研究対象としては関心が低く、青・白磁や粉青沙器より下位に位置付けられ、「差別」されている印象を受ける。「差別」はモノだけでなく、職人にも向けられているようで、地方の窯場を訪ねた時、陽が当たり、風通しの良い高台では明るい作業場のなかで粉青沙器がつくられ、崖の下で暗く、ホロで覆われた湿っぽい工房では甕が作られていた。何か嫌なものを感じた。

白磁を眺めているとその端正さ、硬質感に、ある種、「緊張」感を覚えるが、甕などのオンギは不思議と「ぬくもり」を感じ、なんとも言えない安らぎを覚える。オンギのぬくもりは一体どこから来るのか。それは、オンギが、常に家の庭先に佇み、家族の苦楽を見つめ、優しく包んでくれる「威張らない」器だからではなからうか。

このような韓国人の生活に溶け込み、人に安らぎとぬくもりを与え、かつ、「甕の国」として韓国の代名詞にもなるこの焼物に惹かれた私は、いつの間にか、オンギを正面に据えて、調べて見たい、と思

うようになった。

蔚山オンギマウル

オンギは生活の必需品だけあって、韓国のどこでも作られているが、規模が大きく、韓国の国内需要の過半を生産するのは、慶尚南道蔚山市蔚州郡外高山にあるオンギマウル（オンギ生産団地、マウルは韓国語で村の意）である。朝鮮戦争後、浦項の近く盈徳より移ったオンギ職人が始めたもので、現在は一〇名ほどの「甕器匠（オンギの技術保持者）」が暮らしながら、生産している。

二〇〇四年三月、釜山大の全玉年先生の案内で初めて蔚山のオンギマウルを訪ね、甕器匠の申一誠さんにお目にかかった。申さんは私より七つ程年上の当時六〇歳代前半である。申さんは、われわれを歓迎し、挨拶代わりに、大きな風呂甕（釜）を作って見せてくれた。

大人の腕ほどの太さもある粘土紐を肩にかけ、一段積んでは板で叩き、また、積んでは叩く。径一m、高さ七〇cmほどの風呂釜を作るのに、一時間もかからなかった。途中で粘土がへたるのを防ぐため、熾の入ったスチールの箱を天井から吊るし、製作中の風呂の内側に入れ、器壁を乾燥させて、作ってゆく。その様子は朝鮮時代の絵画資料に描かれた作り方とまったく同じである。

申さんは作業を終えて、こう語った。「オンギは焼物の基本です」と。そこには、高級とされる青磁、白磁をもとを辿れば、オンギに辿り着く、という甕器匠の自負心がうかがえた。

蔚山オンギマウル内にあるオンギ文化館は、やはり、韓国最大のオンギ博物館である。甕や壺の貯蔵だけでなく、祭器、食器、文具、健

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

康・医療具、生産・生業具、建築部材など、日常生活で使われた多くのオンギを展示している。見ていて、実に楽しい。ソウル市道峰区にある甕器民俗博物館は「民俗」と銘を打っているだけあって、オンギ（焼物）の甕とともに、同じ用途を持つ木、真鍮、紙などで作った器も展示し、それぞれの機能が比較でき、これまた、オンギ研究の参考になるが、残念ながら、二〇一七年に閉館となった。

オンギという焼物

オンギを調べて、いまだ一〇年も経たないが、これまで知りえた知見をまとめて、研究遍歴の最後を締めくくりにしたい。

オンギは漢字で「甕器」と記す。「オンギ」とはその韓国訓みの音である。「甕」の字が入るが、オンギは甕ばかりではない。先にも述べたように、実に様々な生活用品、容器がつくられた。オンギで作られないものはない。しかし、それらのなかで青磁、白磁、粉青沙器など他の焼物で作られたものもある。水滴や飯碗などの文房具、食器がそれで、この場合、青磁、白磁製は富者が使い、オンギは貧者が使った。ここに、オンギの基本的役割の一つがうかがえる。オンギは貧者、庶民の器である、ということである。

逆に、オンギでしか作らないものに、加熱用の鍋、釜の他、発酵、醸造用の甕や壺がある。この加熱、発酵、醸造という機能はオンギにしかない、オンギの基本的役割の二つ目である。しかも、このうち、甕が圧倒的に多くつくられた。この、発酵、醸造というオンギにしかできない機能を持ち、かつ一番多く作られた甕を以て、該種焼物が「甕器（オンギ）」と総称された所以ではないかと考えている。

ところで、甕が発酵、醸造の容器として用いられたのはいかなる理由からか。それについて、韓国人はオングの持つ通気性を指摘する。たしかに、緻密で通気性のない白磁が発酵、醸造容器としては使われることはない。それでは、オングの通気性はどのようにして生じるのか。それは砂質で素地の粗い土を使い、一二〇〇℃を越えない酸化焔で焼くからである。

オングに通気性があることは理解した。それでは、根本的な問題であるが、発酵、醸造に空気は必要なのか。実は発酵、醸造の多くは、嫌気発酵と呼ばれ、酸素を必要としないのである。酸素を必要としないどころか、酸素があると、発酵は妨げられる。そもそも、発酵中は発生する炭酸ガスで容器内の圧力が高まり、外から空気が入り込む余地はなくなるのではないか。むしろ、この通気孔を通して、充滿した炭酸ガスが外に漏れ出ることは、十分に考えられるのである。

それでは、逆に、発酵、醸造作用に酸素は全く必要なのか。発酵がひとしきり進み、通気孔を通して炭酸ガスが排出された後、通気孔より空気が入ることはないのか。この段階で、甕内の発酵・醸造物に空気が触れると、どのようなことが起こるのか。

京都伏見の酒造業、長野中野の味噌醸造業の方から、発酵、醸造と空気の関わりを伺った。それによると、基本的に発酵、醸造には空気は必要ない、しかし、活発な発酵がしばらく続くと、発酵は徐々におとなしくなってくる、これは、酵母、菌の力が弱ってくるからで、ここで、空気に触れさせると、酵母、菌は活性化し、再び、発酵、醸造が活発化する、と。

酒や味噌の醸造過程で、ひとしきり発酵させた後、櫂で酒樽の中の醪を掻き混ぜたり、他の樽に味噌を移し替える、天地返しを行うのはこのことと関係があるのか。酵母、菌も生きるためには空気が必要なのである。日本の漬物の世界で、発酵には空気は必要ないが、空気が入ると、菌は元気になる、というのはこのことを物語っている。

キムチ、味噌、醤油などは基本的に半年や一年という長い期間、発酵、醸造を続けなくてはならない。嫌気発酵、すなわち、空気の極めて少ない環境で発酵を行えば、比較的短い時間であつという間に発酵が進む。一年という長い期間、発酵、醸造を続けるには、発酵、醸造のスピードを遅らせるためにも、酵母、菌の活性化を促すためにも、酵母や菌を空気に触れさせる「調整」が必要になってくるのではないか。この調整役としてはまさに通気性のあるオングはうってつけの器といえる。

発酵、醸造容器としてだけでなく、家神祭祀、女性とのかかわりというオングの社会的役割をも指摘しなくてはならない。キムチ、味噌の並ぶ「ジャンドツテ」には、発酵の神であるチュルユン神がおり、注連縄を張り、結界を結び、不浄なものを寄せ付けず、まさに神域のようにつねに清浄が保たれている。家の中には、一家を守り、繁栄をもたすソンジユ神（成主神）、チヨサン神（祖上神）とともに、亡くなった代々の姑の霊を祀るチエースク神（帝釈神）が祀られている。ここで注目すべきは、チュルユンはもとよりソンジユ、チヨサン、チエースクの神々は甕または甕とかかわりながら祀られていることである。さらに留意すべきはこうした家神と絡む甕の管理はその家の主

婦が行っているということである。チャンドットの甕を毎日きれいに拭き、清潔に保つことは主婦の務めとされる。

このような甕と女性との関わりを知った私は、知り合いの韓国人に「あなたはソンジュタンジ（タンジは甕の一種）やチエースクオガリ（オガリは甕の一種）を知っていますか」と尋ねてみた。「ええ、知っています」、「実家にあります」と答えたのは、女性であった。甕の管理には男はかかわらず、韓国社会では、甕はジェンダーの器なのである。

蔚山のオンギマウルには今でも通っている。昔は釜山大の方に車で連れて行っていたが、今は鉄道を利用している。釜山の釜田駅から韓国鉄道公社の東海線に乗り、車窓から海雲台辺りの日本海をのんびり眺めながら、一時間ほどで、南倉駅に着く。オンギマウルへはここからタクシーで約三分。申一誠さんは今でも、日に一〇個ほどの甕を作っている。若い時、申さんはスペイン、日本などでもその技を披露し、韓国オンギ界で知らない人はいない。特に、日本への理解も深く、カラオケで日本語を勉強している。一時、体調を崩されたが、まだまだ頑張って、オンギ文化を伝えてほしい。

五 おわりに

大学に入ってから、半世紀におよぶ私の研究の遍歴を思い出すままに述べてきた。歴史学と出会い、「文字」と「モノ」を結び付けて歴史を語り、大学院では三輪に通い、陶に魅せられ、学院に勤務してから本庄に窯を築き、須恵器を復元し、韓と出会い、齢六〇を越して

金海進礼を歩き、韓人の生活陶器に辿り着いた。われながら、なんとも落ち着きの無い、まさに彷徨ともいえる研究生活を送ったものと思う。三〇代の頃、街の易者に「あなたは変転運の相がある」と言われた。その通りで、気の向くまま、次々とテーマを替え、往生際が悪く、ブルブルと続けてきた。

大学院生の時、長らく東大にいらして早稲田に移られた竹内理三先生が、何かの折に、両大学の学生を比較して、次のような話をされた。東大の学生は、早稲田に比べ、頭が悪い、早稲田は頭がいい分、すぐに先が見えて、興味を失い、別のテーマに切り替える、東大は、その見極めが悪く、いつまでも一つのテーマをおいかけ、早稲田は「鋭」で、東大は「鈍」だ、と。多分にお世辞もあるが、この「分析」に従えば、私は「頭がいい」と「鋭」以外は当たっていて、コロコロとテーマを変えるところは、まさに、「早稲田」的といえる。

さまざまなことを手を出すことから、「佐々木さんの専門は何ですか」とよく聞かれた。たしかに、考古遺物を扱ったり、文字史料を読んだり、日本のことをやったり、韓国に出かけたり、私自身「なんですかね?」と思うこともたびたびあった。が、その都度、一応「考古学です」と答えていた。ただ、そう答えるほど、考古学一筋に勉強したという思いはない。

昔、桜井清彦先生に「考古学をやるなら、土器か石器、どっちか勉強しなくてはダメだ」と言われた。確かにそうで、硬くて、歯が立たない石はあきらめ、土器を選び、一時は土師器の「編年」にかじりついてみた。しかし、初めて発掘に参加した時に感じた、土器を通して

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

「当時の人と触れている」ようなワクワク感は湧かなかった。自分の専門についてモヤモヤした思いを抱きながら、好きな焼物と絡めて研究できる土器焼成、須恵器の復元に向かっていった。

ところが、五〇を過ぎた頃から、残された時間を自分のやりたい、楽しい研究に使う、と思い始め、日韓の焼物研究に傾斜していった。金海窯、オンギを追いかけていた五、六〇代は、まさにワクワクするほど、楽しい時であった。なにしろ、還暦を迎えた「おじさん」が毎日一〇km以上も歩いたんだから。

それでも、何故か、きつぱりと「考古学」とは切れていないような気がする。いろいろ考えてみたが、それは、モノを扱っているからではないか。モノを通して人や社会、そして歴史を語るという方法論までは捨ててはいなかった、ということである。

モノ（考古学）だけでなく、文字（文献史学）、さらにコト（民俗学）などを交えながら、さまざまな方法論で歴史を追いかけてきた。このやり方を学生の頃に理解していただいたのは、卒論の指導教員であった久保哲三先生である。久保先生は三〇年ほど前、還暦の前に亡くなったが、今少し、長生きされ、その後、三輪から陶、さらに海を越えて韓に行き、金海進礼を歩いて調査したことなど、私の研究を見続けて欲しかった。

最後に、記名はしないが、多くの方々に謝意を表したい。長い間、研究費を助成していただいた早稲田大学、ご指導いただいた早稲田をはじめ日韓の各大学、各研究機関の先生方、先輩方、校地文化財調査室の関係者、大神神社の職員の方々、益子、斗山窯をはじめ進礼、蔚

山オンギマウルの窯場の方々、職場を共にした本庄学院の先生方、そして、調査において、時に韓国語を話し、私の助手を務めてくれた妻に、末尾ながら、衷心より感謝申し上げる。

六 未熟な柿

（1）三輪山祭祀

論文

一九七五年 「三輪と陶邑」『大神神社史』大神神社 吉川弘文館

一九七六年 「続・三輪と陶邑―三輪氏の成立について―」『民衆史研究』第一四号 民衆史研究会

一九七九年 「三輪山出土の須恵器」『古代』第六六号 早稲田大学考古学会

一九八〇年 「三輪山祭祀の歴史的背景―出土須恵器を中心として―」『古代探叢』滝口宏先生古稀記念考古学論文集 早稲田大学考古学会

一九八〇年 「三輪山出土須恵器より見た大化前代の三輪山祭祀」『大美和』第五八号 大神神社

一九八一年 「三輪山出土の須恵器（土器観察表）」『古代』第六九・七〇合併号 早稲田大学考古学会

一九八四年 「三輪君氏と三輪山祭祀」『日本歴史』第四一九号 日本歴史学会 吉川弘文館

一九八六年 「『三輪山伝承』私考―その背景にあるもの―」『教育と研究』第五号 早稲田大学本庄高等学院

一九九四年 「奈良県・大神神社祭祀調査（１）」『教育と研究』第一
二号 早稲田大学本庄高等学院

一九九五年 「奈良県・大神神社祭祀調査（２）」『教育と研究』第一
三号 早稲田大学本庄高等学院

（２） 祭祀関係

論文

一九八一年 「三輪山及びその周辺出土の子持勾玉」『古代』第七一号
早稲田大学考古学会

一九八五年 「子持勾玉私考」『古代探叢Ⅱ』 早稲田大学考古学会

一九八六年 「三輪山及びその周辺出土の子持勾玉」『大和美』第七一
号 大神神社

一九九三年 「群馬県の子持勾玉」『二十一世紀への考古学』桜井清彦
先生古稀記念論集 雄山閣出版

一九九五年 「韓国・竹幕洞祭祀遺跡を訪ねて」『王朝の考古学』大川
清博土古稀記念論文集 雄山閣出版

一九九六年 「邪馬台国への道程―倭のクニグニとその風景―」菊池
徹夫編『考古学から見る邪馬台国』（早稲田大学オープ
ンカレッジ講義の記録） 雄山閣出版

報告・講演

一九八九年 『古代の祭祀―玉をとおして―』（足立区立郷土博物館主
催講演会 於：足立区立郷土博物館）

（３） 土器焼成

論文

一九八九年 「窖窯構築と焼成の実験的研究―中世陶器の復元をめざ
して―」『教育と研究』第八号 早稲田大学本庄高等学
院

一九九二年 「黒色土器の吸炭処理について―その実験的考察―」『古
代』第九四号 早稲田大学考古学会

一九九二年 「古代の土器の色について」『翔古論集』久保哲三先生追
悼論文集 真陽社

一九九四年 「還元焰小考―発色の視点から―」『古代』第九八号 早
稲田大学考古学会

一九九四年 「多目的実験窯の構築および焼成実験報告」『史観』第一
三一号 早稲田大学史学会

一九九六年 「色調から見た瓦質土器の焼成について―蔚山下埜遺跡
の場合―」『嶺南考古学』第一八号 嶺南考古学会

二〇〇〇年 「宝墩遺址出土陶器片的焼成方法」『宝墩遺址』 早稲田
大学長江流域文化研究所

二〇〇一年 「中国・宝墩遺跡出土土器の焼成方法について」『教育と
研究』第一九号 早稲田大学本庄高等学院

二〇〇二年 「エジプト・ファイユーム、ナズラの土器づくり」『エジ
プト学研究』第一〇号 早稲田大学エジプト学会

報告・講演

二〇一〇年 『土器の製作過程―実験・民族・民俗考古学の観点から

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

―『全北大学校考古文化人類学科 BK111 (ex-RTC) 作業団 海外碩学 招請特講 於…韓国全北大学校』

(4) 須恵器の復元

論文

一九九六年 「加耶の陶質土器を眺めて」岡内三眞編『韓国的前方後円形墳』雄山閣出版

一九九九年 「須恵器の発色に関する実験的研究」『日本考古学協会第六五回総会 研究発表要旨』日本考古学協会

二〇〇〇年 「高火度還元焰土器の焼成に関する科学技術的研究―須恵器・陶質土器の復元を目指して―」『福武学術文化振興財団 平成一一年度年報』福武学術文化振興財団

二〇〇一年 「須恵器の色調を復元する―焼成実験からの報告―」『考古学ジャーナル 一〇月増刊号』第四七九号 ニュー・サイエンス社

二〇〇四年 「須恵器の色―実験的技術復元と理化学的分析に関する考察―」『古代』第一一二号 早稲田大学考古学会

二〇〇五年 「陶質土器・日本須恵器の実験の色調復元」佐々木・齋藤正憲共編『世界の土器づくり』同成社

報告・講演

二〇〇三年 「還元焰土器の焼成技術―焼成実験からの報告―」(『第七回福泉博物館国際学術大会 三韓・三国時代の土器生産技術』釜山市博物館主催 於…韓国釜山福泉洞博物館)

(5) 金海窯

論文

二〇〇七年 「金海進礼粉青沙器―益子から進礼への『民藝』の展開―」『教育と研究』第二五号 早稲田大学本庄高等学院

二〇一〇年 「進礼のチェビッコ文」『合田好道のことゝその道程を辿って』合田好道誕生一〇〇年記念文集 益子「陶庫」・道祖土「和田窯」

二〇一〇年 「金海進礼の粉青沙器生産―その三五年間の歴史と様式の変遷―」『釜山大学校考古学科創設二〇周年記念論文集』(日本語・韓国語) 韓国釜山大学校考古学科

二〇一二年 「日韓焼物交流の―様相―益子から金海進礼への民藝の展開―」岡内三眞編『技術と交流の考古学』同成社

二〇一八年 「海をわたった日本の民芸」佐々木・齋藤正憲共編『やきもの つくる うごく つかう』近代文芸社

報告・講演

二〇一〇年 「合田先生が金海進礼に残したもの」(合田好道生誕100年記念講演 於…益子陶芸メッセ)

二〇一五年 「日韓文化交流の新しい視点―陶器の相互交流を通して―」(桜美林大学北東アジア総合研究所 於…桜美林大学四谷キャンパス)

二〇一八年 「合田好道と金海窯―韓国に渡った益子焼―」(『土の風土記』栃木県民芸協会講演会 於…益子参考館うえん台)

(6) オンギ関係

論文

一九九九年 「韓国 of 窯屋」『アシアン・レター』第五号 「東アジアの歴史と文化」懇話会

二〇〇五年 「韓国・済州島のオンギ（甕器）づくり」『世界の土器づくり』同成社

二〇一〇年 「韓国の甕器、家神そして女性」『アシアン・レター』第一六号 「東アジアの歴史と文化」懇話会

二〇一二年 「韓国の民藝陶器—オンギとその周辺—」吉村作治編『永遠に生きる』中央公論美術出版社

二〇一四年 「オンギの土と炎—韓国生活陶器の特性—」『アジアの土と炎—民族誌と実験考古学の最前線—発表要旨集』「東アジアの歴史と文化」懇話会・早稲田大学西アジア考古学勉強会

二〇一八年 「韓国人の愛する甕」佐々木・齋藤正憲共編『やきものつくるうつるつかう』近代文芸社

報告・講演

二〇一七年 「キムチの甕」（アジア・ユーラシア総合研究所 客員研究員第一回報告会 於…桜美林大学千駄ヶ谷キャンパス）

(7) 編・著書

二〇〇五年 共編『世界の土器づくり』同成社

二〇一六年 『韓国の恩に報いた日本人 合田好道 益子から金海進

三輪（みわ）から陶（すゑ）、そして韓（から）へ

二〇一八年 共編『やきもの つくるうつるつかう』近代文芸社
礼への民藝の展開』桜美林大学北東アジア総合研究所